

役員一覧

理事長	安保 雅博	東京慈恵会医科大学 教授
	大高 洋平	藤田医科大学 教授
	佐浦 隆一	大阪医科大学 教授
副理事長	津田 英一	弘前大学 教授
	中村 健	横浜市立大学 教授
	美津島 隆	獨協医科大学 教授
理 事	浅見 豊子	佐賀大学 診療教授
	緒方 直史	帝京大学 教授
	尾崎 敏文	岡山大学 教授
	城戸 顕	奈良県立医科大学 教授
	酒井 朋子	東京科学大学 准教授
	酒井 良忠	神戸大学 特命教授
	下堂 蘭 恵	鹿児島大学 教授
	辻 哲也	慶応義塾大学 教授
	西田 佳弘	名古屋大学 教授
	西村 行秀	岩手医科大学 教授
	芳賀 信彦	国立障害者リハビリテーションセンター 総長
	花山 耕三	川崎医科大学 教授
	藤原 俊之	順天堂大学 教授
	宮本 健史	熊本大学 教授
	川手 信行	昭和大学 教授
監 事	近藤 国嗣	東京湾岸リハビリテーション病院 院長
	三上 靖夫	京都府立医科大学 教授
事務局幹事	佐々木 信幸	聖マリアンナ医科大学 教授
	篠田 裕介	埼玉医科大学病院 教授
	三上 幸夫	広島大学 教授

日本リハビリテーション医学会の概要

- 創立 1963年9月29日
- 会員数 11,437名(2024年6月)
- 専門医 2,903名 認定臨床医 3,814名(2024年6月)
- 学術集会・地方会など 年2回(毎年6月頃に年次学術集会、11月頃に秋季学術集会が開催されています。他にも地方会学術集会、各種研修会が開催されています。)



公益社団法人 日本リハビリテーション医学会

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-12 内神田東誠ビル2階
Tel. 03-5280-9700 Fax. 03-5280-9701

<https://www.jarm.or.jp/>



「活動」を リハビリテーション科専門医になろう! 育む医学 6



公益社団法人

日本リハビリテーション医学会

2024

リハビリテーション科は日本専門医機構が定める 基本領域の1つです



公益社団法人
日本リハビリテーション医学会理事長
(東京慈恵会医科大学
リハビリテーション医学講座主任教授)

安保 雅博(あば まさひろ)

リハビリテーション医学は、さまざまな疾患・外傷・病態により生じた機能障害の回復を促しつつ、結果として残存した障害を克服しながら、人々の「活動を育む」医学ですが、日本リハビリテーション医学会の役割は、その機能回復と社会活動への復帰を総合的に支援することだと思っています。

リハビリテーション科は一般社団法人日本専門医機構が定める19の基本領域の1つであり、2018年度から新専門医制度による研修がスタートしています。リハビリテーション科では、「活動」に視点をおいて診療を行い、医療・介護・福祉の領域で重要な役割を果たしています。

リハビリテーション科専門医は、障害に対する専門的治療技能と幅広い医学知識・経験を持ち、リハビリテーション医療のチームリーダーとして良質なリハビリテーション医療を国民に提供することを使命としています。さらに、リハビリテーション医学を進歩・普及させるべく研究ならびに教育にも尽力しています。

リハビリテーション科専門医は全国に2,903人(2024年6月時点)おりますが、超高齢社会の医療ニーズに対応するためには、さらに多くの専門医が必要とされており、リハビリテーション科専門医の活躍の場は拡大しています。

これまで日本リハビリテーション医学会は数多くの活動を行ってまいりましたが、今後、特に推進すべき3つの方針を述べさせていただきます。

1 内部・外部に開かれた日本リハビリテーション医学会にします

まず、内部に開かれた日本リハビリテーション医学会とは、若手参加による組織全体の活性化です。理事会や委員会などに若手が参加して活躍できるように、さまざまな施策を用意します。

次に、外部に開かれた日本リハビリテーション医学会とは、関連団体との連携と協働の推進です。財務・人事の面から日本リハビリテーション医学会組織の強靱化をはかり、リハビリテーション医学の推進のために他の学会・協会との連携が、より緊密になるように外交を強化します。

2 学術・教育を推進します

学術活動による学問的な発展は当然ですが、リハビリテーション科医の育成に全力を尽くします。どのような障害や疾病を持つ患者さんも総合的に診ることのできる医師がリハビリテーション科医ですので、専門医制度基本領域の診療科に相応しい医師教育のためのカリキュラム充実と均てん化に努めます。また、リハビリテーション医学はチーム医療を前提としていますので、関連職種を含めた教育体制の構築にも注力します。

これまで日本リハビリテーション医学会は日本リハビリテーション医学教育推進機構と共同で数多くの基準となる教科書を作成しました。この教科書を上手く活用して、リハビリテーション科医はもとより他診療科医師、そして、広く関連職種を含めた卒前・卒後の教育体制を充実させます。

3 社会への貢献を増やします

バラスポーツ支援、災害支援をさらに進めます。障害を持つ方々の就学・就労支援にも尽力します。包摂的を意味するインクルーシブ、多様性を意味するダイバーシティの両者を同時にマネジメントできる医学の専門家こそリハビリテーション科医であると思っています。そんなリハビリテーション科医が先頭に立って、これまで以上に障害を持つ方々の復権や社会活動をサポートします。

障害を持つ方々と社会との接点をどのように作るかが大きな課題ですが、日本リハビリテーション医学会では障害を持つ方々の社会活動や働き方について広く議論し、障害を持つ方々の社会活動と就学・就労支援を積極的に進めます。

3つの方針は、いずれも一朝一夕では成し遂げられるものではありません。数多くの課題に対して理事、監事、代議員、そして、日本リハビリテーション医学会会員の皆様と力を合わせて取り組んでいく所存です。

リハビリテーション科専門医を目指すあなたへ

「リハビリテーション科専門医」とは

リハビリテーション科専門医とは、病気、外傷、加齢などによって生じる機能の低下や障害の予防・診断・治療を行い、機能の回復並びに活動性の向上や社会参加に向けて能力を回復させ、残存した障害や不利益を克服する、「リハビリテーション医療」を専門とする医師です。リハビリテーション科専門医は、リハビリテーション医療に

携わる医師、看護師をはじめとする医療スタッフ、関連職種のチームリーダーです。そのため障害に関する専門的な診断・評価・治療技能と幅広い医学知識、そして他のスタッフと適切に連携するための専門的な知識や技能、そして豊富な経験、さらに患者さんから信頼される資質・行動力が求められます。

リハビリテーション科専門医になるには

リハビリテーション科専門医を目指す方は、全国の研修プログラムのうち1つに所属し、3年以上の研修(基幹施設と連携施設・関連施設を利用した研修)により、研修カリキュラムをすべて満たすことで研修修了となります。研修修了後に専門医試験を受験し合格すると、日

本専門医機構よりリハビリテーション科専門医の認定を受けることになります。原則として、研修プログラム制が優先されますが、各種の条件では、研修カリキュラム制も用意されています。詳しくは、日本リハビリテーション医学会のホームページをご覧ください。

研修プログラムの概要

リハビリテーション科専門医の研修プログラムの概要・特色などについてご紹介します。

研修プログラムの目的は、障害に対する専門的治療技能と幅広い医学知識・経験を持ち、他の専門領域と適切に連携するチームリーダーとしてリハビリテーション診療を主導し、さらに患者さんから頼られる資質・行動力を有する医師を育成することです。

希望した医療機関で3年以上の研修を行い、指定されたカリキュラムを満たせば研修が修了となります。カリキュラムは大きく、「総論(リハビリテーション診断、リハビリテーション治療など)」と「各論(運動器疾患・外傷など9つの分野)」に分かれています。

研修プログラムは、リハビリテーション診療を急性期、回復期、生活期に分けて考えた場合に、いずれかに偏った研修にならないように配慮されています。このため研修期間中に、基幹施設での研修(6ヶ

月以上)の他に、病棟主治医の期間を原則12ヶ月以上(6ヶ月以上必須)含める必要があり、この中に回復期リハビリテーション病棟での研修を6ヶ月以上含めることを必須としています。生活期のリハビリテーション診療についても、関連施設等を利用して経験することで、患者さんの家庭や社会での活動の回復や増進をサポートするという貴重な経験を積むことができます。



患者さんに寄り添うリハビリテーション科専門医

急性期



疾患の急性期に対する早期のリハビリテーション治療を安全かつ確実に実施し、適切な予後予測に基づいた診断と適確な治療のゴール設定などを行います。

回復期



回復中の入院患者さんの診断、治療ゴールの見直し、障害の受容を助ける情報提供、理学・作業・言語聴覚療法の処方、装具の処方、在宅への調整、内科的管理などを中心に急性期と生活期をつなぐ橋渡しを行います。

生活期



生活期におけるリハビリテーション医療、および介護における医師によるリハビリテーションマネジメントにより、活動を維持・向上させて、家庭や社会での活動の回復・増進をサポートします。



リハビリテーション科専門医を選んだ理由

リハビリテーション科専門医を選んだ理由について
若手医師に聞きました。



脳出血で寝たきりになった患者さんが 再び教壇に立つまでを支える

大阪急性期・総合医療センター 30代 男性

教師をされていた方が脳出血となり、寝たきりで転院されてきました。初診時、片麻痺、構音障害、高次脳機能障害（注意障害、遂行機能障害）を認めていました。リハビリテーション治療により、機能の改善を認め、入院中に模擬講義をしていただきました。そして模擬講義ではスライド作成から、講義、質疑応答まで行っていただきました。講義をされる時の患者さんは、リハビリテーション治療を行っている時とは表情、雰囲気とも違い、教師の顔をされていたことが印象に残っています。その後、入院リハビリテーション治療と通院リハビリテーション治療を行い、再び教壇に復帰されています。専攻医時代に最も印象に残った患者さんでした。

超急性期から慢性期までニーズが多く やりがいが見つかる

和歌山県立医科大学附属病院 20代 男性

他施設で二度と歩けないと診断された方がいましたが、当院で再度評価し、適切なリハビリテーション治療を行うことで、独歩で家に帰れるようになるまで機能改善が得られました。研修を通じて、他科からのコンサルトの領域が、かなり広範であったことから、リハビリテーション科医はジェネラリストとしての素質を求められていると感じました。そして障害を持つ方々とともに生きている社会の実現の一助になればと思います。初期研修で市中病院を回ったことがある人は想像できと思いますが、病院から退院する際に、リハビリテーション医療の視点は必須かつ最重要です。例えば急性期病院なら回復期病院へ転院するまでしか診ることができないことも往々にしてあります。また超急性期から我々が治療することで、患者さんの機能予後や生命予後まで改善させることができます。急性期～生活期まで全てにおいて需要のあるリハビリテーション科なら、やりがいは絶対にみつかります。

急性期から生活期まで長期的な視点で診療できる

横浜市総合リハビリテーションセンター 30代 女性

急性期から生活期まで長期的な視点で診療できることが魅力だと思います。さらに病気の治療の先にある患者さんの生活に関われることや、緊急が少なく体力的な余裕もできるため、長く働き続けることができることも魅力だと思います。

精神的な面でもリハビリテーションが 支えになった…という患者さんの言葉

順天堂大学医学部附属順天堂医院 20代 女性

研修医時代に受け持った脳神経内科の患者さんが、リハビリテーション治療によって歩けるようになったのを見て、リハビリテーション医学・医療の大切さを痛感し、学びたいと思いました。研修医時代、脳血管障害で意識障害に陥った患者さんが、徐々に回復して、リハビリテーション治療によって自宅退院し、復職できるまでになりました。その患者さんが、「精神的な面でもリハビリテーション医療が」とおっしゃってくださったことが印象に残っています。リハビリテーション科医はリハビリテーション医療によって機能を回復させ、障害を克服するだけでなく、患者さんの人生に寄り添っていくことができる、とても魅力的な仕事です。

全ての疾患を対象にでき、自分の興味で専門も持てる

北海道内病院勤務 20代 男性

患者さんの疾患からその人の生活、人生まで寄り添って診ることのできる魅力的な仕事です。そのため非常に分野が幅広く、全ての疾患がリハビリテーション治療の対象といっても過言ではありません。ジェネラリストであると同時に、ロボットや嚥下、高次脳機能、スポーツなど自分の興味のある分野のスペシャリストを目指すことも可能であることに魅力を感じます。

病気になった後の患者さんと ご家族を支えることにやりがい

東京慈恵会医科大学第三病院 30代 女性

リハビリテーション科の授業を受けたときに、患者さん自身の病気だけでなく、社会背景も含め、医療・社会福祉サポートにも携われるところに魅力を感じました。研修中に、高次脳機能障害が残存しているにも関わらず、退職したために収入がなくなった患者さんが受診され、身体・精神障害者手帳と障害年金の申請、社会福祉サービス資源を整えることなどを行い、就職活動や日常生活の不安軽減、社会復帰をサポートできたことを経験しました。今後、診断・治療にAI（人工知能）が関わってくる可能性があります。ケースごとに異なるきめ細やかな社会サービスの調整はAIといえども容易ではなく、専門医の数も少ないため、需要は多いと思います。

幅広く活躍中のリハビリテーション科専門医

様々な専門分野で活躍中のリハビリテーション科専門医をご紹介します。



宇宙医学 速水 聡 先生 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）主任医長

宇宙飛行士の健康管理を担う航空宇宙医師をしています。宇宙環境で働く宇宙飛行士の健康管理を通じて得られる知見や経験を、地上の予防医学や産業保健に還元しようと臨床研究に取り組んでいます。リハビリテーション科医だったからこそ今の自分があると感じています。



障がい者（パラ）スポーツ 上出 杏里 先生 国立成育医療研究センター リハビリテーション科診療部長

障害を持つ方々がスポーツを安全に楽しむには、医学的ケアが必要です。それが、一般的なスポーツドクターと障がい者（パラ）スポーツ医の違いであり、障害と向き合うことを専門とするリハビリテーション科専門医だからこそ、やりがいと魅力を実感できると思います。



再生医療 田代 祥一 先生 杏林大学医学部 リハビリテーション医学教室 講師

神経再生医療にとってリハビリテーション医学は必要不可欠です。移植した細胞が生体内で有機的に作動するためには、細胞の生着や増殖、さらに神経系への分化を後押しする「機能訓練」※を含む「運動療法」というプロセスが重要で、リハビリテーション医学は再生医療を織りなす大切な要素の一つです。

※「機能障害の治療のための訓練」の意



ライフプランとキャリア形成 藤原 清香 先生 東京大学医学部附属病院 リハビリテーション科准教授

治らない病気や手術後の後遺症の前に医者は無力だと思いましたが、リハビリテーション科医にとってはむしろそこからが一番やりがいがあって、患者さんが笑顔で社会に戻っていった時が一番嬉しい瞬間です。結婚、出産、育児などのライフプランとキャリア形成が両立しやすいのも、リハビリテーション科専門医の魅力です。

Information

リハビリテーション科医に なろうセミナー

日本リハビリテーション医学会では、臨床研修医、リハビリテーション科に興味のある医師を対象に「リハビリテーション科医になろうセミナー」をオンラインで開催しています。

セミナーでは現役専攻医によるリレー講演、現役専門医の講演、Q&Aコーナーなどもあります。詳しい情報は、QRコードよりご確認ください。



Information

海外研修補助制度・若手海外研修特別補助

日本リハビリテーション医学会では、国際学会などでの会員の活躍を促進するために、2つの補助制度を設けています。海外研修補助制度は、海外のリハビリテーション施設への訪問・業績発表や、国際学会での発表や視察などに対して、一定の要件を満たした45歳以下の正会員（年間1名）に対して最大30万円の補助金を支給しています。また「若手海外研修特別補助」は、アジア・オセアニア地区のリハビリテーション医学関連学会、具体的にはアジア・オセアニア地区リハビリテーション医学会（AOCPRM）やアジア・オセアニアニューロリハビリテーション学会（AOCNR）などでの演題発表を予定している40歳以下の正会員（毎年1名）に最大10万円の補助金を支給します。



リハビリテーション医学・医療の主な対象

脳血管障害・頭部外傷	運動器の疾患・外傷	脊髄損傷	神経筋疾患	切断（外傷・血行障害・腫瘍など）	小児疾患	リウマチ性疾患
循環器疾患・呼吸器疾患・腎疾患・糖尿病・肥満	周術期の身体機能障害・合併症予防	摂食嚥下障害	聴覚・前庭・顔面神経・嗅覚・音声障害	がん（悪性腫瘍）	スポーツ外傷・傷害	骨粗鬆症、熱傷
						サルコペニア
						ロコモティブシンドローム
						フレイル

リハビリテーション科専門医が対象とする疾患や障害は、脳血管障害、運動器の疾患・外傷、脊髄損傷、切断、神経筋疾患、リウマチ性疾患、小児疾患、循環器・呼吸器・腎疾患などの内部障害、摂食嚥下障害、聴覚・前庭・顔面神経・嗅覚・音声障害、がん、周術期の身体機能障害、など幅広い領域に及んでいます。また超高齢社会への移行に伴い、病院や施設だけでなく生活期の居宅でも良質なリハビリテーション医療が求められています。

急性期・回復期・生活期のリハビリテーション医療

3つのフェーズにおける疾患・外傷の専門治療、リハビリテーション治療、リハビリテーション支援、および生活期の介護における医師によるリハビリテーションマネジメントの位置付けとその比重を示しました。

急性期	回復期	生活期
疾患・外傷の専門治療	疾患・外傷の専門治療	疾患・外傷の専門治療
リハビリテーション治療 ・機能の回復・活動の低下防止と早期改善 ・周術期合併症予防	リハビリテーション治療 ・機能の回復・能力低下の最小化 ・活動の積極的な改善	リハビリテーション治療 ・障害の克服 ・改善した活動の維持 ・さらなる活動の改善 介護における医師による リハビリテーションマネジメント
リハビリテーション支援 家庭・社会活動へのアプローチ（準備）	リハビリテーション支援 家庭・社会活動へのアプローチ（準備促進）	リハビリテーション支援 家庭・社会活動へのアプローチ（実践）

リハビリテーション医療の診断・治療・支援

リハビリテーション診療の診断・治療・支援という3つのポイントについてご説明します。

1 リハビリテーション診断

活動の現状と問題点の把握、活動の予後予測が目的

- 問診
- 身体所見の診察
- 各種心身機能の評価・検査
- ADL・QOLの評価
FIM（機能的自立度評価法）、Barthel指数など
- 栄養評価・画像検査
単純X線、エコー、CT、MRIなど
- 血液・生化学検査
- 電気生理学検査
筋電図、神経伝導検査、脳波、体性感覚誘発電位（SEP）、心電図など
- 生理学検査
呼吸機能検査、心肺機能検査など
- 摂食嚥下機能の検査
反復唾液嚥下テスト、水飲みテスト、嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査など
- 排尿機能検査
- 病理学検査
神経・筋生検など

2 リハビリテーション治療

活動の最良化が目的

- 理学療法
運動療法、物理療法
- 作業療法
- 言語聴覚療法
- 摂食機能療法
- 義肢装具療法
- 認知療法・心理療法
- 電気刺激療法
- 磁気刺激療法
rTMS（repetitive transcranial magnetic stimulation）など
- ブロック療法 ●薬物療法（漢方薬を含む）
疼痛、痙攣、排尿・排便、精神・神経、循環・代謝、異所性骨化など
- 生活指導
- 排尿・排便管理
- 栄養療法
- 手術療法
- 新しい治療
ロボット、BMI（Brain Machine Interface）、再生医療、ICT（Information and Communication Technology）やAI（Artificial Intelligence）の活用など

3 リハビリテーション支援

活動の社会的支援が目的

- 家屋評価・住宅改修
- 福祉用具
- 支援施設
（介護老人保健施設・老健、介護老人福祉施設・特養）
- 経済的支援
- 就学・復学支援
- 就労・復職支援（職業リハビリテーション）
- 自動車運転の再開支援
- 法的支援
介護保険法、障害者総合支援法、身体障害者福祉法、児童福祉法など
- パラスポーツの支援

リハビリテーション医療チーム

リハビリテーション医療チームが機能するためには、各担当診療科の医師や看護師、関連専門職、他のチームメンバーがリハビリテーション医学・医療を総合的に学べる教育システムが必要です。

理学療法士（PT）	各担当診療科の医師（DR）	薬剤師（PH）
作業療法士（OT）		臨床心理士（CP）／公認心理師（LP）
言語聴覚士（ST）	リハビリテーション科医（Physiatrist）	社会福祉士（CSW）・医療ソーシャルワーカー（MSW）
義肢装具士（PO）		介護支援専門員（ケアマネジャー）（CM）
看護師（NS）		介護福祉士（CW）
管理栄養士（RD）	歯科医師（DDS）	歯科衛生士（DH）・その他の職種



刊行物

日本リハビリテーション医学会は日本リハビリテーション医学教育推進機構と共同で数多くの教科書・テキスト・参考書を作成し、リハビリテーション医学・医療の普及に尽力しています。

急性期のリハビリテーション医学・医療テキスト (2020年・金芳堂)	回復期のリハビリテーション医学・医療テキスト (2020年・医学書院)	生活期のリハビリテーション医学・医療テキスト (2020年・医学書院)	総合力がつくり、リハビリテーション医学・医療テキスト (2021年・日本リハビリテーション医学教育推進機構)	社会活動支援のためのリハビリテーション医学・医療テキスト (2021年・医学書院)	脳血管障害のリハビリテーション医学・医療テキスト (2021年・医学書院)
内部障害のリハビリテーション医学・医療テキスト (2022年・医学書院)	リハビリテーション医学・医療における栄養管理テキスト (2022年・医学書院)	耳鼻咽喉科頭頸部外科領域のリハビリテーション医学・医療テキスト (2022年・日本リハビリテーション医学教育推進機構)	運動器疾患・外傷のリハビリテーション医学・医療テキスト (2022年・医学書院)	介護領域のリハビリテーション手法手引き (2023年・日本リハビリテーション医学教育推進機構)	リハビリテーション医学・医療における処方作成テキスト (2023年・医学書院)

研修会の企画と開催

- 実践リハビリテーション医学研修会
（脳血管障害、運動器疾患、摂食嚥下障害、循環・呼吸・代謝疾患、などに関して）
- 急性期病棟におけるリハビリテーション医師研修会
- 回復期リハビリテーション病棟専従医師研修会
- 生活期のリハビリテーション医療にかかわる医師のための研修会
- リハビリテーション科医になろうセミナー
- かかりつけ医のための訪問リハビリテーション診療に関わる研修会
- リハビリテーション関連専門職研修会
- その他、教育連携学術団体と共同で行う研修会

e-learning

e-learningは、日頃から忙しい会員の先生方のために、自分のスケジュールに合わせて、いつでも、どこでも、何度でも、リハビリテーション医学・医療について学ぶことができる便利なサービスです。会員であれば無料で本医学会ホームページから閲覧できます。

